



有機農業のチカラ コロナ時代を生きる知恵

大江正章 著

コモンズ
2020年10月
1700円+税

たと聞いている。

「治療で体が辛い時以外はひたすら仕事に没頭しているような初期の入院生活でした。それこそが自分にとって死への恐怖に打ち勝つ力であり、生きる証であった」と、ともに生き支え続けた

妻・孝子さんはお別れ式の参列者への「お礼の言葉」に記している。

コロナ時代を生きる私たちは、グローバルゼーションと高度成長・都市化を見直し、ローカリゼーションと食料自給へ向かわざるを得ない。持続可能性を考えれば、有機農業への大転換という道しかない！

(コモンズ社ウェブサイトの案内より)

いのちと向き合い本書を刊行

昨年12月15日、突然届いた出版社「コモンズ」代表・大江正章さんの訃報。呆然としていたら、逝く前に本書を遺していたことを知り、また仰天。

本書は、ジャーナリスト・市民運動家でもあった大江さんが、「この10年間に求められて書いてきた論稿」を自ら編集して緊急出版したものである。3月に肺がんが見つかり、4月から入院を繰り返す闘病生活のなかでの本作りであったようだ。最後となってしまった9月の入院前に、本書のゲラを校了にし

合、都市農業、自治問題などを、IからVIIの7章に分けて収録されている。

プロローグ(「有機農業的感性と田園回帰」)は、闘病中に執筆したとみられる。初出は「日本有機農業学会の20年を振り返って」と題する論稿で、学会設立の中核を担った故・足立恭一郎氏(当時、農林水産政策研究所)が提唱した「有機農業的感性(センス)」を援用し、生産者や消費者を「同時代を生きる同行者」として捉え、日本の食・農・環境・生命を守るために連携することの必要を強調している。達成への道筋や手段が異なっている。その違いを認め、小さな違いを過剰に非難しない、それを「オーガニックな感性」(26ページ)と言っている。

有機農業が地域に広がっているリーダーたちは、自らの理念は曲げないが、他者に対しては寛容だ。本書では、人を呼び込み、活気ある地域を創ろうとしているリーダーたちやオーガニックな感性を持っている若い世代の有機農業者たちによる有機農業の展開に注目し、まさに「有機農業のチカラ」に期待している。有機農業陣営の四分五裂の現状をのりこえる「鍵」とみているような気がする。

「高校生や大学生、若い社会人の方々にもぜひ読んでほしい」。

大江さんの幅広い問題関心・守備範囲を反映して東日本大震災前後以降10年間にわたって書かれた多岐・多面的論稿が、有機農業を軸にして、思想、学校給食、地域づくり、田園回帰、災害(原発含む)と復興、協同組